

第十二回 武蔵野文学賞「高校生部門」

小説部門 選評

● 選考委員

武蔵野大学教授	土屋 忍
武蔵野大学教授	町田 康
武蔵野大学客員教授	楊 逸
武蔵野大学名誉教授	三田 誠広
武蔵野大学名誉教授	宮川 健郎

● 選考結果

最優秀賞	「セヴンティーン・ブルーの生命線」	松井 孝輝
優秀賞	「ヴァニタスの檻」	宇津木 咲来
受賞候補作	「わたし小説」	石井 彩音
	「循環」	福地 優良
	「オレオレ」	間宮 光里
	「生類」	渡邊 葵
予選通過作	「赤と色、それが僕」	大森 智華
	「クルミ」	加藤 紗礼

● 選評（土屋 忍）

今回も力作が多数寄せられた。選考過程は次の通りである。まず、全応募作品の入念な選考を経て、八作が予備選考を通過した。そこからさらに一次選考が行われ、六作品が選ばれ、最終選考に進んだ。選考委員全員が六作品を精読した結果、もつとも多くの評価を得たのは「セヴンティーン・ブルーの生命線」であり、次点が「ヴァニタスの檻」

であった。満場一致で、それぞれを最優秀作、優秀作に決定した。

その他の作品の評点は、「オレオレ」「生類」「わたし小説」「循環」と続いた。これらの順位は、予備選考時点の順位とほぼ合致している。

順位は順位である。結果的に順位が低くても、その作品を高く評価した委員がいる（だから最終選考に残っているのだ）。順位が高くても、全員が手放しで賞賛しているわけではない（歴代の芥川賞の選評を見よ）。然るべき文学賞であれば、どここの文学賞でも同様である。選評は、それぞれの委員のスタイルにしたがって書かれている。揃えたりまとめたりしないほうが届けられることも多くなると考え、そのまま掲載することにした。

小説から始まったこの武蔵野文学賞高校生部門も、今年で十二年目を迎えた。年々、小説に対する方法的な意識が高まっているように感じる。文体へのゆきとどいた配慮、才気を感じる煌めきも多くみられるようになった。内容的には、躊躇いながらも社会や世界へ開いていこうとする方向性をもった作品が増えた。

そうした中で、小説部門には、今年度より町田康、楊逸という現在活躍中のふたりの作家が加わり、さらに充実した選考をおこなうことができた。受賞者は自信をもって次のステージに進んでほしい。惜しくも受賞に至らなかった応募者も、公開された選評を噛みしめたり唾棄したり一喜一憂したりしてもらえたら幸いである。またこのページをみた高校生で、自作で選考委員の鼻を明かしてやろうと思った人がいたら、ぜひ次回の応募を考えてほしい。

松井孝輝さん、宇津木咲来さん、このたびはまことにおめでとうございました。

● 選評（町田 康）

・「セヴンティーン・ブルーの生命線」 松井 孝輝

イメージの奔流の中に小説の芯がある

言葉の奔流に意思と秩序がある。

それらが作者によつてチューニングされコントロールされている。

小説を書く動機が萎えない。

言葉が正確に使われている。

流れに必然性があり、説得力がある。

言葉と肉に纏まれている感があり才能を感じる。

・「ヴァニタスの檻」 宇津木 咲来

一切は空として滅びが正当化される。日記、人形の独白、兄妹の現実、の使い分け、

書き分け巧み。言葉の使い方正確、表記の工夫によつて耽美的な世界を巧みに描いて

美事。

美意識に因り過ぎているため、表面的で幼稚に感じられる。

・「わたし小説」 石井 彩音

文章正確。真の自分の回復に至る道筋が直線的で説得力を欠く。

・「循環」 福地 優良

作意明白。

戦争と平和、国家と個人、引き裂かれた愛など。

主題に対する考えが浅く、直感力もない。

文章紋切り型。設定に工夫なく稚拙なプロパガンダに堕している。

・「オレオレ」 間宮 光里

愛とは何かについて実感を伴う思索あり。莫塵に寝転がり愛されたいと願うところなどところどころ文章愉快。

横山の同性愛の仄めかし好らしく、言葉を無造作に投げつけるような記述が内容に合っている。

最後の SA のハシリライスから取調室のハシリライスへ繋がるところなどおもしろい。ガロ風味。

そうして現実感がないのは好ましい点である一方、説得性は欠き、構成その他の点でそのバランスを取る工夫が必要と思われる。

・「生類」 渡邊 葵

文章は破綻して詩的。発想や眼差しが独自。ただし要修行

詩的で幻想的な作中ところどころ地名や日常が色濃いところにミックスの妙あり。

● 選評（楊逸）

・「セヴンティーン・ブルーの生命線」 松井 孝輝

誤って父親を殺した国境警備隊の警官を殺しに行く「きみ」。冒頭から「線」と言う単語に様々な定義を持たせたうえで、それを、「戦争」「大雨」「大洪水」「自殺」「鬱病」「精神病院」「楽器焼却」などで繋げて「きみ旅」を描いていく。挙句の果てに「銀河」だの「太陽が破裂する」だのを経て、「隕石の影響で街の電力は消滅」に喰らってから、とうとう小説を書く「ぼく」という目的地にたどり着いた。

二人称語りと改行もなく密度のある文章で築く「大きな物語」。読んでいてなんだかスマートフォンのゲーム画面を追っているかのような錯覚も起きる。「技」がすこ

い。しかし主人公はずっと「生死の線上で駆けている」危機的な状況にもかかわらずその痛みも苦しみも一向に伝わってこないばかりか、人間臭さも体温も感じ取れなかった。「重み」のある作品にならなかったのは「技」のせいなのか。

結末になって「ぼく」を登場させ「一筆書きで小説が書きたかった」と説明して、メタフィクション作品にしたものの、それ以上の「意図」も欲しかったし、最後の一段落の付け足しはまさに蛇足。「一筆書き」に貫いた方が作品としての完成度が高いではないか。

・「ヴァニタスの檻」 宇津木 咲来

両親の亡き後、アンティークショップを受け継いだ兄と妹、その関係は、物置部屋から発見された一体のアンティークドールによって、妙なもの変わっていく。

・煤けた肌が白く滑らかになり、関節と関節も繋がって、やがて目も群青を宿した「人形」が「お兄様」の手で再生される過程を傍らでじっと覗く妹は、「あの子」への嫉妬や怒りが募って穏やかさを失っていく。

その心理を、作中で「く此ノ気持ちハ一体何ナノデショウカ。身が焦がサレテ融ケテユク様なー」という、あえて日本語表記を崩し無茶苦茶にして表現するように工夫した。

「空の空、すべては空なり」や「肉体は所詮は使い捨ての器」などに体现される主人公の歪んだ愛を、日記にですます調という丁寧語で綴られる。不気味さもその文体によって増幅して、読む者にぞっとさせる。ピッタリの文体と表現で構成された物語だ。評価したい。

・「わたし小説」 石井 彩音

「人と関わるのはあまり得意でなく」中学に上がると一段と「ぼっち」になった「私」

は、「天才を装う」ために、趣味を訊かれたときに「小説を書くこと」そして夢は「小説家になる」とうそぶいた。小説家になるという夢だけで「天才」だと認識されるかどうかはともかくとして、そのことはのちに「私」は部活などで本格的に小説を書き始めるきっかけになった。苦労や挫折を色々味わったりしたすえ、所属する高校文芸部の大賞を受賞するとまで成長するも、「おめでとう」と祝われるときにはすでに文芸部を辞めると決心した、

「自我」を一つのテーマに扱う作品として、「ぼっち」をより強調するためか、「私」をあえて人間関係と対立するように描いたようだ。それに作中に漂う、主人公の所以のない「孤高感」。支えになるはずのいところ「紗絵」のいたわる言葉は中身も説得力もなかったせいで、それが余計に際立って浮いてしまった印象だ。

・「循環」 福地 優良

「戦争とはなんでしょうか？」……授業の課題をきっかけに考え始めたという問いにまるで答案を提示するために構築された物語ではないか。主人公、[㇏]国人のユリウスは、戦争に敗れた敵国[㇏]国から来た転入生ミカさんと出会い、いじめ自殺など一連の出来事を経て急接近してやがて恋愛関係になる。二人の関係は、大衆の[㇏]国に対する憎悪感情と国の政治情勢に翻弄されるがまま浮きつ沈みつしながら、戦争の残酷を描く。

漠然とした概念を、物語に載せて具現化する。構成がしっかりしていて、選挙ポスターや教会、救世主などの要素も取り入れて効果的だった。ただ作りはどこか「説話的」で、結末まではまるで正解へと導くかのような方程式を解くみたいな書き方に違和感を覚える。

・「オレオレ」 間宮 光里

「僕」「高木たかし」はギャンブル中毒、酒癖の悪い45歳の「日雇い労働者」。「愛されたい」ために「お金が必要」という理屈で、仲間の「横山隆夫」とともに「犯罪（オレオレ詐）を企てる。初回は300万円、続いて500万、500万と、三回やっただけであっさり1300万を手にした。

「愛って、ここにあるじゃん。交通事故おこしてさらには相手にケガまで負わせたクズ息子に、どうしてそんな大金を貸せる？」……役柄である「息子」を演じながらも、詐欺ターゲットなる「母親」の愛情を確かに感じる「僕」。善と悪の間で葛藤する、、冒頭の冗長な導入部分、饒舌の語り口、そしてギャグっぽい結末などに不満があったが、日雇い労働者のワーキングプアや、孤独、家族関係など昨今日本が抱える社会問題をうまく掬い取って活写しているのではないか。

・「生類」 渡邊 葵

「私」・「涼子」の一人称語りの作品。前半は、主人公の失恋による苦しみを描くが、感情と感覚ばかりが過剰で、それに支える「訳」はどうにも読み取れなかった。情緒小説かと読み進んでいくと、後半になって「穂波」というバーテンダーが新たに登場し、「私」はバイセクシャルで「浮気」をたくさんしていることが明かされる。

前半「彼」と初デートしたしゃぶしゃぶ屋で「彼」とのキスを思い出して乱れ狂ったあの惨めな「私」は、「彼に一途」な女というイメージを持たされたというのに、、構成上の「矛盾」が多く、人物造形にも文体にも一貫性がなく、前半と後半のアンバランスが目立つ。書き手はきつと、ただただ自分自身ないし「失恋」に酔いしれて溺れる主人公キャラを作るに精いっぱい、整合性などについて考える余裕はなかったかもしれない。

● 選評（三田 誠広）

松井孝輝の「セヴンティーン・ブルーの生命線」は独特の緊張感をもった文体で異彩を放っている。ただ文体に比して描かれている内容は意外に凡庸なものと感じられた。この文体ならもっと深いテーマに挑めるのではないか。宇津木咲来の「ヴァニタスの檻」も個性的な文体だがこれも内容は類型的だ。それでも冒頭の旧約聖書「伝道の書」の引用など、書き手の思い入れが強く感じられて、欠点はあるが魅力的な作品だと評価したい。

● 選評（宮川 健郎）

どの作品も、熱量が高く、それぞれ見どころはありますが、いずれも観念性が勝っていて、うまく受け取れない感じが残ります。六つの最終候補作品のなかで、詩的な文章が際立つ「生類」と、「戦争とは何でしょうか？」という問いかけからはじまり、大きなテーマと何とか格闘しようとした「循環」を高く評価しました。